

平成 23 年度 第 4 回被服学教育 FD/ICT 活用研究委員会 議事概要

- I. 日時 : 平成 24 年 2 月 21 日 (火) 11 時 00 分から 12 時 00 分まで
- II. 場所 : 私立大学情報教育協会 事務局 会議室
- III. 出席者 : 高部啓子委員長, 伊佐治せつ子委員, 田中早苗委員, 鈴木美和子アドバイザー
(事務局) 井端事務局長, 森下主幹, 松本職員

IV. 議事概要

1. 学士力の実現に求められる教育改善モデルについて

議事に先立ち事務局長より以下のような説明があった。11 月に発刊する冊子の目的は、大学ガバナンスに向けた提案である。昨年まで組んできた授業モデルの骨子と学士力をもう一度推敲し、用語の説明や図を入れるなど解りやすくする工夫を加えたい。学士力は表現を再度見直し、また授業モデルでは教員の教育力が問われるので、このモデルを実現するために教員がどのような資質を備えなくてはならないのか、また教員の指導能力を学内または学外の組織の中で FD をしていかなければならないのか、そのようなところに踏み込んで提案したいと考える。相対的なガバナンスに対する提案は事務局で作成するが、個別的には大学が組織を挙げて取り組んで頂きたい、ということを訴えて行きたい。私情協は ICT というフィールドから入るが、あくまでも体面授業と ICT を組み合わせたところで編集する。一般に 'ICT を用いた' と表現すると ICT しか使わない教育であるかのような誤解を受けるが、あくまでも体面有りきで、そのような随所に配慮しながら報告書を作って行く。

本日議論して頂く教育力は、授業モデルを実現するために教員がどのような指導能力を持たなくてはならないかということになるので、授業モデルが 2 つあれば 2 つを統合させた教育指導能力、(モデルが) 1 つであれば 1 つということになる。被服学ではモデルが 2 つあるので 2 つを統合し、このような授業を実現するために先生方にはどのような力が備わっていないかを議論して頂く。このようなことを研究して頂く際に、念頭に置いていただくことがある。1 つは参考資料の 4。通常、指導能力というシラバスや授業設計であるが、中央教育審議会の分科会では、シラバスを充実するためには先生一人で作成するのは無理なのではないか、先生方がチームでシラバスを読み合って良いものを作成していかなければならないと提案されている。その上で授業内容が重複しないようにして体系化していく。今の学生は科目が多すぎる。大学で質保証して行くには、先生方がチームで科目構成をして行く、チームで学びを作って行くことが必要である。教育指導能力として授業科目間での連携が随所に出てくる。先生方は連携が苦手であるが、それを組織的にどのように定着していくかが課題である。

もう 1 つは、2006 年に私情協が「ファカルティデベロップメントと IT 活用」として提言した内容が教員の教育力としてあらゆる場面で使われている。例えば、海外の大学の業績評価法を調査した結果が参考資料 1 にある。米国の大学では、アシスタントプロフェッサーからアソシエイトプロフェッサーになるためにはテニユア審査があり、その中を見ていくと、授業科目ごとにシラバス、教育方針、教育目標、教育方略、学生の成績、学習成果の証拠、授業改善の努力、個人の教育力、教育改革に関する大学機関への貢献、学外機関での教育実績となっている。米国では先生の授業は 9 ヶ月しかなく、残りの 3 ヶ月は社会貢献や自分の力を試す期間となっている。日本もそのような視点を取り入れていく必要がある。資料 1 の 17 ページ、①授業の設計・評価・改善の能力のところ、研究科・学部・学科の到達目標に向けた工夫として、組織目標に対する授業の位置付けや役割の明確化が重要である。授業の自己点検・評価・改善の工夫では、特に米国では改善努力の記録と効果の検証が求められる。以下、②学生主体授業の取り組み能力では学習意欲を高める工夫としての小テストやアンケートの利用、③人間力向上への取り組み能力ではカーネギーメロン大学の推論機構を取り入れた創造的な学びを例にして、④教室外で

の学習指導能力ではケンブリッジ大学のチュータリング制度について、⑤授業の質保証では教員のポートフォリオ、成績評価の工夫について、⑥の教育態度に関する能力では熱意の実践、威圧的雰囲気のない授業運営、わかりやすい授業運営の工夫、知的好奇心刺激について説明があった。

2. 教員の教育力について

- ・現在多くの大学は各専門分野を担当する教員は1名しか居らず、教員同士が別の分野に関われるようなシステムができると連携の可能性がある。
- ・連携の例として、ドレス科目と情報基礎と連携するという例がある。製作で出来上がった写真でポートフォリオを作成、情報基礎の授業でプレゼンテーションの技術を学び、e-ポートフォリオにより教員が学生の意見を見て評価する。デジタルでの評価、ドレスコースとITとの連携を既に実践している。近い専門分野との連携が難しいが離れた分野との連携は比較的しやすい。
- ・学識のレベル、被服教員が備えていなくてはならない教員力とは何か。有本先生曰く、学識とは4つある。1つは発見、2番目は統合、応用、教育ということが一般には言われている。最初の3つ（大半）は研究能力であるが最後の教育が問題となっている。
- ・新しいことを研究し教えるのが研究と教育であるが、教育方法を学ばずして大学教員になっている。
- ・教育をどうやっていいのかわからない先生が多い。大学の先生が努力していないとは思えず、FDは自己の中で行っているがそれをどのように自分に取り入れたらよいか解らないのではないか。
- ・話し方が印象的な先生の授業は学生に人気があり、講義よりも実習の方が、学生の評価は高い。
- ・学生の興味に我々が合わせる必要はないのではないか。学生の関心に迎合するのではなく必要性を喚起させることが重要である。
- ・今の学生はノートをよく採り板書はそのまま写す。板書は先生がまとめてくれているものと思っている。したがって自分でまとめることができず、自分の意見は持てない。
- ・逆指名して質問を考えさせるという手段は有効である。何かを課して考えさせるのは有効。
- ・基礎基本をきちんと教えておけば応用が利くはず。応用から入る先生は学生の好きなモノを作らせないと学生がついてこないと考えているが、それでは正しい応用力が身につかない。
- ・大学で何を教えるべきかの根本が揺らいでいる。
- ・学生は上手じゃなくても理解できればよい。
- ・今の学生は従来の生活技術が身につけていない。作ることも選ぶことに長けている。
- ・情報が山のようにあるので作りたいモノの夢やイメージは持っている。
- ・家庭にミシンがないのでミシンの扱いなどが身につけていない。現在の小中高の家庭科では被服実習をやらない先生が増えている。家庭科の先生が食物や保育分野の出身であると被服実習を敬遠する。
- ・入学してくる学生の能力のギャップが大きいので1・2年の授業は大変であるが3年以降はコースに分かれるのでそれぞれに合った方向に進む。被服は何か興味を持たせることが重要である。
- ・関連する科目と連携して統合授業をする。部分縫いの学生作品を写真に撮って情報科目で学生たちに評価させる。学生は自由制作であれば意欲的に取り組む。
- ・連携のインセンティブをどう考えるか、シラバスを教員チームで見合うようなインセンティブを入れながら連携の土俵を作る必要がある。
- ・‘マナバ’による意見交換は問題を多角的に見ることができて有効である。

V. 次回の開催日程

新年度改めて設定しメールにて出欠の確認を取る。

以上